傾城島原蛙合戰

近松門左衞門作

序詞 是に似たる非ありと註せし程明道の言葉。盛なるかな妥を以て知んぬ。佛を說くの法正に似たる邪あり。君に仕ふるの道忠に似たる姦人。玉と欺く白露の濁る世を明けく。流れを正す源の氏の再興。六十餘州の總追捕使。大納言賴朝卿へ威權四海に儀型たる。地文治の帝後鳥羽の院不思議の御夢を御覽あり。御夢の吉凶國土の治亂にかゝる趣。安倍ト部の勘文武家に是を考へ政道正さるべしと。御夢の全體を繪圖に寫し。鎌倉に下し賜れば。問註所の南向上段の床にかけまくも。畏つて御拜見大江の廣元和田畠山千葉梶原。同じく拜して面面に。工夫をめぐらす夢判じ フシ凡慮の。及ばぬ所なり。地賴朝甚だ怪み給ひ 詞能く見られよ方々。僧とも俗とも別け難き異人。兩足に日月を踏んで雲に乘り。口より五色の虹を吐き。大地の草木黃金の花咲きたるとの帝の御夢。吉凶如何心を殘さず評定あれと宣へども。地短才不學の身を恥ぢて各詞なき所に。事知り顏に梶原平三景時進み出で。詞異なる事に御心を費さる。元夢は元氣の虛心の影體も性もない事。夢合せ夢判じなどは陰陽師の渡世。鎌倉殿の問註所にて。歷々集り眉を顰め夢評定。智ある者の笑ひ草と一口に言ひ消せば。地君を始め滿座の人々フシ赤面してぞ見えにける。地畠山の重忠景時が。過言を聞きかね。詞これ梶原殿。此の評定を智ある者の笑草とは。此の重忠は其の笑ふ人こそ可笑しけれ。地既に周禮の占夢に。六種の夢を舉けて占ふ旨を記せしが。聖賢の書をも笑草にする人は。如何なる智者か承らんと詰められ。詞なう書面ばかり聞きはつり。義理を知らぬは外題學問これ笑草。但し學力ある重忠殿此の夢何と占はれし如何に〳〵と言ひ募る。いや御邊の尋ねに及ばず心を殘さず申せとの仰。某が考ふる所能く聞き不審あらば難ぜられよ。そも此の夢日は日本神道。月は月支佛道。佛神二つの道を王法左右の翼として。世を保ち國を治め民を敎化し給ふなり。地陰陽家には仙宮の蛙息を吐いて虹と成ると沙汰せり。蛙は卽ち蝦蟆仙人が仙術。不思議自在の奇特を綴し衆生を迷はす。道に似て道にあらず。詞儒には是等を異端と嫌ひ佛家には邪法と破す。此の邪法國に起り日月の翼を踏み折れば。王法忽ち覆り地に墮つる瑞夢ならずや。地昔楊雄が甘泉の賦を作り文章に案じ疲れ。寐ね夜の夢に五臟六腑を吐くと見て。其の朝より心神疲れ果てしとかや。智は身の內の寶棚引く虹は國土を潤す。雨露の氣にして天地の

寶。天の寶を吐き盡せば天の氣褒へ國土も枯るゝ道理。詞國に弓箭動き兵亂の兆には。陰陽の木先づ亂れて。草木に金銀の異形の花咲くと鶴林玉露に見えたり。地彼此引合せて考ふれば。邪法を弘むる異人窃に諸人を懐け徒黨を結び。王法を傾くべしと佛神の御示し。最も御愼みの御夢候と。例を引き書を引き義理明々と述べらるれば。大將あつと感心あり辯口我張りの梶原も。非難打つべき詞なくフシ頂を下けて聞き居たる。地賴朝暫く御思案あり。今儒佛盛んの神國に邪法を弘むる者なンど。よもあるまじとは思へども。詞九郎義經が郎黨常陸坊海尊仙術を學び。高館落城にも其の行方なし。地所詮横目の武士を選み京鎌倉の町屋に住む。諸浪人の詮議させん。役人には誰々か然るべき人柄。沙汰せられよと宣へば。地伺候の人々一同に浪人改めとは御尤の御政道と。役人の評定あり。重忠は足立右馬之允然るべしと申さるれば。景時は又富樫の左衛門こそ一器量ある勇士。是非富樫をとフシ遮つて言上す。詞重忠重ねて。いや〳〵富樫の左衛門は一歳領分安宅の關を預り。判官殿の造り山伏を十二人迄見損ぜし無眼力。御役柄不相應とありければ。景時大きにせいてヤア某がいふ程の事打込む氣か。足立右馬之允は先づ年若し。殊に上意も伺はず。葛西の清重が娘と緣組の約束したる我儘者。御分が足立を引く如く此の景時は富樫贔屓と。地顔を赤め聲を張る重忠あざ笑ひ。詞天下の御政事に贔屓とは梶原殿ちと御麁相。諸大名の婚禮先づ內談極つて。其の後伺ふ掟なれば。葛西が娘と緣組の契約足立には些か誤なし。地富樫が關所の不吟味は天が下に隱れなし。大事の公用貴殿の贔屓なればとて。少も憚る重忠ならずと。詔はず飾らぬ賢者の詞。景時又閉口し フシ御前白けて笑止なり。地賴朝卿天性人を捨て給はず。富樫も今は先非を悔み役義に不念もあるまじ。詞足立富樫兩人に申し付けられよ。若し相詰めあるならば是へ召せとの御諚。地折ふし足立右馬之允景久。富樫の左衛門宗重。侍所の當番にてオクリ召に〳〵應じて出でければ。地近う〳〵と御座近く召され。京鎌倉町屋住み諸浪人吟味の事。二人に申し付くる條委細老中の下知を受け。詮議を遂けよと宣ふ所へ。詞御廣間の取次罷出で。今度奥州秀衡が子供討手の軍兵。御味方大きに勝利を得凱陣仕り。先手の軍大將葛西の郡司清重。梶原源太景季八田の知家なんど。大佛の切通し迄罷着く。直に鎌倉へ入れ申すべきや伺ひ奉るとの訴なりとぞ申しける。地賴朝御悦喜淺からず。錦戸兄弟四人の者は本家同然の大敵。詞誅伐する事先祖の威光源家長久の兆。討手の者ども早速對面すべけれども。帝御夢の愼み。鶴が岡に奉幣使を以て御湯神樂を捧げ。地夢違への神事を思ひ立ち火水を清むる鎌倉。血を流せし軍兵長れあり。暫く切通に控へさせ則ち景時。汝賴朝が名

代として出向ひ。敵錦戸の太郎泰衡。伊達の次郎國衡。四郎高衡。樋爪の五郎兄弟四人が首を見屆け。味方の者ども功名の實否を糺し。後日に違亂なき樣に記し置け。二人は近郷立別れ巡見せよとの御諚にて御暇賜り。扨若宮の御代參神事の御沙汰細かに君が信の德廣く。雲井に渡る鶴が岡神威も。增して三重へます鏡。フシ萬代照す。若宮に。地鐘の緒も解く夢も解く夢蓮への御神事と。世上に響く鈴の聲オクリ神樂の。笛のあな尊やと老若悅び沸返り。湯立參らす鎌倉の。ホフシ谷七郷が袖はえて。ハルフシ紫淺黄。うこん紅梅鶯の。縫ふてふ花の名にし負ふ。葛西の郡司清重が。スエチ秘藏娘の琵琶の姫。右馬之允景久と。妹背の緣の許嫁。父の郡司は奥州より。はや凱陣と聞くにつけ。嫁入は何時ぞ。アヽ辛氣々々で夜の目もろくに差異もなき。夢の氣がかり祈らんと。乳人腰元氣に入りの下女のお福がよちり腰。徒歩を歩へば足長の。フシ鶴が岡に

ぞ着き給ふ。地外を見つけぬ奥女中これは〳〵賑かな。賣物見世物鳥居の奥に皷太皷が聞える。御神樂が始まつた。サアお急ぎとそゝれば姫君アヽ待ちや〳〵あれを見や。詞氣の毒詞下馬に乘馬を繫いだは旗本大名の參りか。若し知る人の方ならば嫁入前の自らが。地善惡の評判受けるもいやらしと宣ふ折柄。破れ烏帽子に白張裝束御幣肩けて來る男。乳人立寄り袖を控へ。詞これ禰宜殿。あの馬は誰樣の參りぞやと問ひければ。月毛に青貝の鞍は富樫の左衛門殿。黑栗毛に蒔繪の鞍は足立右馬之允景久殿。二人共に大役を承り其の悅び門出の社參。神主殿へ銀百枚。社家中へ十枚づつ。こちらが樣な禮禰宜仲間三十人へたつた錢壹貫に三升樽。地其の代りに强飯が喰ひ放題と言ひ捨て通れば腰元中。詞さつても御緣深い許嫁の殿御樣と一時の神參り。あの馬にお姫樣のお心ついたもこれ不思議と。地言へば下女のお福が。ハテ右馬之允樣の馬ぢやもの。お姫

樣のおなかへフシ應へる筈ちやと笑ひける。地姫も嬉しく遣瀨なく。八幡樣の引合せ是を序にお顏も見度し。詞を交そサア皆おじやと。進み給ふがいや〳〵。詞氣の毒自らを妻にと父上に貰ひかけ。梶原頼み威勢を以ていひかけても。足立殿へ先約とて御承引なき恨み。父上に顏を振る。武士に似合はぬさもしい心。妨なすは知れた事止めにしよ。エイまゝよ行てお目にかゝらうか。大事の殿御の浮名や立たんエヽ邪魔な奴。名もとが〳〵しい富樫め。す善尺魔胸の癪。心に足のあるならばフシ神の忌垣も越えぬべし。地神慮[illegible]立右馬之允旅出立きらやかに。長羽織の徒士の者。詞且那お下向お馬引きませいお馬〳〵圍介雁介。地參れと呼べども油斷の馬取方々散つて出合はず。地便りに引かるゝ琵琶の姫馬取これに。罷在るとは女とも見えず。男皷の染手拭小褄きりゝに裾短か。一振ふり出

す手付腰付ハイドウ。口縄解いてたぐりくり〳〵膝くり栗毛の胡馬北風に ッシ嘶えいなゝく。君が御馬にとつ付いた。千里も萬里も二世も三世も添うて離れぬ御馬ぞひいざ。いざ〳〵。 ッシ召しませいとぞ引廻す。 地一目見るよりそれとは知れども餘所々々しく。 詞扨々おやさしい是は何方の姫君ぞ。中間どもがのらをかはき近所になきをお笑止がり。情と申しお心利き。千萬千萬忝しさり乍ら。足立づれの端侍がお姫方に口取らせて乗るならば。罰が當つて 地落馬致すは定の物。彼の僧正遍昭が女郎といふ草花の罰當りて落馬して。我落ちにきと。人に語るなと詠ぜし歌を聞くにつけなゝう。 詞十七八の娘の罰はあらたなもの。 地お放しなされと引取る手綱放せとは他人向きかいの。 詞夫と師匠は主同然。張良とやらいひし武夫も。師匠の沓を ッシ取りしぞや。 地女房の身で夫の馬の口取るに何の解儀の入る事ぞ。思ひ焦れて氣が騷ぐいつそ此の身を鞍にして乗り鎭めて下さんせと。前輪に縋りなう右馬様〳〵と。言へば馬は己れが事と頭を垂れて ッシしなだるゝ。 地右馬之允も憎からず琵琶の姫とは見つれども。言上を經ね間は互の遠慮。舅郡司殿もはや大佛の切通し迄凱陣。近々に言上し呼び迎へて其の夜から。足立右馬之允景久が妻女房ぞ。先づそれ迄は葛西の郡司殿の姫君。御手を穢し慮外至極と鞍越しに手を取交し。戴き合ひ締め合ひにつこと目許にこほるゝしほ。馬の背重き戀の重荷 ッシやがて嫁入の兆かや。 地かゝる所に烏居の内人騒ぎ。朱鞘の大小編笠目深の若者。走り出でて姫に縋り小聲に成つて。 詞なんと久しや妹兄源六郎清治覺えてか。 ヤア 地兄様か年月案じ暮せしに。是はどうした態ぞいの。 詞されば〳〵始めて父の名代大番に上り京珍しく。傾城狂ひに身を持崩し放埓無法の行跡ゆゑ。勘當受けて遠國に漂泊し。 地今度奥州御征伐父諸共に向ふべき身が。弓矢神に捨てられし親の罰。 地歎き悔むに ッシかひもなく。當社の神力を祈り勘當の訴訟せんと參詣せしに。富樫の左衛門それ浪人よと取廻す。鎌倉追放の某詮議にあうては身の難儀。何とぞ思案あるまいかと語る間に富樫が郎黨。目を光らして騙廻れば。負うた子より抱いた子先つお姫様大事ぞと。腰元つぎ〳〵引つ包み。餘所にや森の下道を ッシ人目忍びて歸りけり。 地程なく富樫かけ來り。 詞そりや以前の奴通すなと前後を固んで左衛門大聲あげ。編笠着ながら神前を拜し世を忍ぶは浪人に紛れなし。出所住所假名實名具に申せ。主持ならば誰が家來包まず申せ上意によつて詮議なり。 地なんと〳〵とぎしめけども身の上も名乗られず。陳ずべき當話も出ず。一期の沈浮と引つ蹴ひ ッシ死に身に成つてぞゐたりける。 地足立始終は聞きたれども。相役なれば用捨もならず。 詞エ、手ぬるし富樫殿。笠をたぐつて面を御覽ぜ。 地尤さうと笠打落せ

ば廿二三の屈竟の男子。誰見知つたる者もなし。右馬之允横手を打ちャ。詞汝は身が槍持の遊平め。言語道断の曲者。病氣と僞り奉公引き。主人も恐れぬ遊山ありき。手討にしたい奴なれど公用の門出赦し置く。富樫殿御覽なされ。下々に慈悲をなせば結句主を悔る。地重ねては首が飛ぶ以後を嗜み供せいと。裏は情表は劍の詞の五音源六は夢見し心。富樫二人の目色に氣をつけ。詞合點參らぬ足立殿。鍵持に似合はぬ刀の拵へ。前髪面を見たやうなと言はせも果てず。ム、尤ようお心付けられた。三年の切米にも叶はぬ大小の鍔縁がしら。前髪より召使ひ家の法度を知りながら。博奕したるに疑なし。エ、地憎しと仕込杖おつ取りのべ。腰のつがひを碎けてのけと。打つ杖は痛からで武士の情の骨にしみスエテ頭も。上げず泣きゐたり。地左衛門ほとんど疑晴し。詞拙者が扱ふもう御堪忍〳〵。といふをしほにてこりや。詞お詞ゆゑに赦し置く。あの奴が持つた道具汝肩けて供をせいないとばかりに武士の道あり仁ある心の底を。斟んで烏毛の俄槍持。安宅の關にて判官撲ちし武藏坊にも懲りもせぬ。愚痴は其の身の富樫の左衛門別れて。こそは三武〳〵向うたる。地奥州討手の諸軍將。葛西の清重比企の能員梶原源太景季八田の知家。切通しの松蔭に面々の印大幕打たせ。鎌倉の左右を待ちければ。一家一門迎の衆持たせの行器悦の酒肴。濱松の音さゝんざの聲。酒にあうても兵の。勇みある今日のフシ酒宴なり。鎌倉より梶原平三景時御代官として。幕前に案内せさせ。其の身は床几に威儀正しく。詞今度各粉骨を盡し強敵一時に亡びし事。多年弓馬の嗜顯れ御感斜ならず。重ねて恩賞御沙汰あるべし。在所々々へ歸つて休息せられよ。則ち某御名代首實檢と述べければ。地幕の内より比企の能員洗革の鎧。同じ毛の甲を高紐にかけ。弓手の膝をついて不肖の某。詞錦戸の太郎が平泉の城を受取り。手痛く攻むれば泰衡たまらず。蝦夷が島へ逃げんとせしを。國分原に追詰め討取る首に候なり。地げに抜群の功名古今に比類なし。大將分の印として君より授け賜つたる。金の采配ゆゝしく子孫に傳へられよと賞すれば。能員勢ひ天にも到る。半月の印を持たせフシ我が本城にぞ立歸る。次の幕より八田の知家。伏縄目の鎧烏頓子かけして。射向の袖をゆりかけ。某苟も。伊達の次郎が紅戸フシ立籠る。阿津賀志山の山城を。一揉に攻落し。打取る所の次郎國衡が頭候。神妙々々當世の英雄誰か肩を比べん。御許の金の采配握つて天下に憚りなしとの褒美の詞。忝しとゆふづけの烏の羽の。印をはつとのし立てフシ己が籠にぞ。歸りける。隣の幕より嫡子源太景季。裲布の鎧直垂さわやかに着流し。詞不堪の我等僅かに父の貧裝を繼いで。樋爪の五郎が籠つたる。烏の海の城郭を乘崩し。五郎俊衡が首地見參と。いふより景時扇を上げ働き

〳〵。汝は一歳一の谷の大手生田の杜の手柄といひ。日本無雙の勇士景時が子なるぞや。金の采配子々孫々に取傳へよや梓弓。矢筈の印立てさせ親子床几を並べしは嚴しう。こそ見えにけれ。稍あつて景時大聲あげ。詞佛戸兄弟四人の敵に味方も四人の大將。四郎が首は誰が取つたるぞ實檢時移る。何事に躊取るエ、馬鹿らしいと罵つたり。地三蓋笠の印立てたる幕打上げて琵琶の姫。鎧にあらぬ卯の花染。裾の蹴廻しフシ草摺長に。梶原が前にしやんと坐し。詞人々凱陣の歡び迎へ。我も〳〵と親子兄弟集れども。地葛西の郡司は一人の男子源六は勘當。憂にも晴にも琵琶と申す娘。自ら迎に參り。詞最前より父の詞。ヤイ琵琶よ。なぜに男と生れてくれなんだ。地男子ならば物の具させ打連れ向ふ程ならば。今の悔はあるまいもの。實檢に入れる首がなければ見參して何の腔もない。まつ此の通り申せと父郡司が口移し。聞き給へやと伸び上り。詞そも葛西の郡司が向うたる仙北の城郭。一方は海一方は深田。後は嶮岨の山高うして烏も通はず籠りし敵は。四郎高衡凡夫を誑す邪法を行ひ。形を隠せば水の月目には見れども手に取られず。術をなす事魔法の如し。されども郡司は老功數度の軍に立渡る。霧の晴間に能つ引いて放つ矢。四郎が右手の膝口。笠深に射付けてどうと伏す所に。御子息源太殿の郎黨大河七郎兼任。首を取らんと走り寄る。郡司押へて無禮なり西夫。我が主の場所を捨て餘所の攻口。他人の射留めし首取らんとは。法を知らぬ烏滸者とせり合ふ中に。幻術自在の四郎雲霧に紛れ失せてけり。郡司苛ちに苛つて塀も櫓も乘崩し。堀を埋め。山を壞ち。五十四郡を探せども行方なく。地無念の凱陣諸人に面もフシ合されず。地弓矢取る身は相互君の御前は景時殿。幾重にも頼み奉る。詞これより打立ち四郎が首提げ。會稽の恥辱雪ぎ度きとの申し樣。地親の歎きは子の歎き私とても同じお願ひ。畠山殿和田殿歴々ありても。御前の執り成しは梶原樣。雀の千聲鶴の一聲フシ頼みまするとぞ語りける。詞源太が勢の中よりヤア嘘つかせぬ。大河七郎是に在り。詞四郎が膝口に射付けし某が矢。我が攻口の城の大將。首は郡司に取らせてくれとせり合ふ間に落失せた。直に急度詰め地開かんと。躍り出づるを立隔て。詞女なれども使は琵琶といふ清重が子。地言ふ事いへサア聞かんと。肱を張つたる男勝り。幕打上げて父の郡司ヤア、構ふな姫。詞蟲のやうなる下郎めと諍ひ勝つて何面目。武運盡きたる清重が。腹切る樣を地君へ申せ梶原と。刀を抜けば景時是はと走り寄り。詞一徹千萬むざ〳〵と腹切つては。金の采配取上げられ。武士道永く廢つて。葛西の家の破滅笑止笑止。爰に一つの料簡あり。豫々申す此の姫の事。右馬之允が先約を變改し。景時が仲人富樫の左衛門にめあはされよ。返禮には

金の采配。家に傳はるやうに御前は某請取り申す。右馬之允が義理一つ缺けば和殿が武門の家も立ち。賴まれし景時が身分も立つ。地萬一足立がこねるとも上へ申して仕やうは樣々。景時に任されよと呟く中より。ぐつと忿の額の筋。はつたと睨んで喧しい景時。詞武士と武士との義理を違へ。娘が緣付のお陰を蒙り。武門を立つる葛西でなし。御邊なんどが取合で。金銀の采配千本持つても蠅拂ひに劣つたり。此の采配は忝くも君より拜受。地娘に讓るといひ捨て。刀を肋骨にがはと竪横十文字。返す刀の切先を。口に咬へ眞逆樣俯伏に フシ成つてぞ死したりける。なう情なやと琵琶の姫スエテ歎くにかひのあらばこそ。詞梶原えせ笑ひ。不覺者の無念腹切り損〳〵。地武名廢つた印采配召上げらると引つたくる。いや〳〵命に代へし采配渡しはせぬと取付くを。突退け〳〵追はへ行くを追拂ひ。梶原親子 フシ主從立歸れば力なく。父の死骸に抱き付き前後も。分かず泣きゐたり。地葛西の清重切腹と近邊取沙汰。聞くより右馬之允源六打連れ走り着き。ハッ〳〵〳〵南無三寶と。驚くばかり詮方なく。源六は勘當の親の身に手も觸れられず。身體の前に蹲り。わつと泣いて立上り。相手は梶原主從と。駈出でても當どなく。立戻つても堪られずエゝどうかせん如何せん。子は有つてなし。かゝる禍の御最期我一人の不孝の科。お慈悲に御免と五體を投げ大聲上げて歎きしが。詞これ足立殿。敵四郎が幻術を行はば。我また念力を以て討留め父が恥辱を清むべし。御身は妹連れられはやお歸りといひければ。右馬之允かぶりを振つていや〳〵。言上も遂げぬ契約は内證づく。采配召上げられ。地武名廢りし葛西と一家の緣を結んでは。末代足立が家の瑕思ひも寄らず。詞四郎を討つて武運開くる其の時。改めて結ぶ迄はふつつと緣切る。地暇の印は其の鏑と詞も名殘も振切つて立歸る。袂に縋り琵琶の姫。成り果てし我々ゆゑ。大事の弓矢のお家の名字。連れて下すもフシ勿體なし。御前樣奥樣と言はれ度い望もない。奉公人と名付けて。お寢間の御用に召使つて下さんせとスエテ涙ぐむも痛々しゝ。詞これなう。譬へば禁酒する人が酒鹽と名付けても。飲む口は同じ酒。その如く奉公人と名付けても。寢間用の用とは酒鹽の奥樣。ならぬ〳〵。ムゝ御尤々。そんなら傾城白拍子は遊び者。其の身にならうが必ず逢うて下さんすか。地エゝ繰言行先までの約束は。緣切らぬも同じ事夫婦の緣は運次第と。詞を形見に引別れ行く姿。見送るは二世の夫見返れば三世の父。二つは切れて二筋切れぬ涙の絲。琵琶の姫も源六も。無念さ悲しさとり〴〵に思ひ。亂れて立つたる所に。詞大河七郎眞先に。梶原が郎黨數十人半途より取つて返し。ヤアあの若い者は。必定郡司が勘當の悴源六な。琵琶の姫を富樫にめあはさねば。主人景時一

分立たずはや〳〵渡せも　地但し引つ立て歸らうか一日返事と呼ばはつたり。なう兄樣あれこそ父の功名盜み大河七郎と。聞くより源六鑓の鞘外し躍り出で。　詞よい目利。葛西の源六清治。女房もらひの詰開きは存ぜず。長々在京して傾城にまぶれ。傾城の貴ひには隨分粹な男。廓の出入はやりが捌く。　地サア返事は此の鑓先と三段にくりかけたりけり。生溫いぬくわか。鑓の柄切つて切り折れと。喚いてかゝるを左右に受け鑓一本に數知れぬ。刀を拂ひ打落し念所々々をえら突。手に立つ者も　三重へ無かりしが。　地七郎が弟大河九郎。跡に廻つて石突本を確と取れば。七郎は印付の瑕をかけて提つたり。ム、ウ奴等これ何とする。まつ斯うすると兩方より打ちかくる切先を。頭を振つて受け外し。　鑓引上げて一振ふれば左右へぱつと退きながら。直に切込む二人が打物。石突と鉾先と本末に受け流し。二間を五間に使ひなせるは手利の祕術。逃げても逃がさず打つも打たせず。追廻し追靡け二人が胸板。はた〳〵はつたと突かれて同じ枕に反る所を。おつ取り直して止めの鑓。金輪際迄ぐつ。〳〵。ぐつと通りし念力に。時の敵は討つたりと兄弟顏を見合せて心を含む涙と笑ひ。夫の暇の印はそつちへ鑓一本。日本に敵は四郎一人。戰術劍術魔法邪法叱根尼の法。雲霧の城に籠るとも親の讓りの身體髮膚は我が城郭。骨は石垣肉は塀。眼は矢狹間五臟六腑の高櫓。手足は軍兵力あり〳〵あらゆる武藝懸引。進退。下。知の大將我が一心と。一念固めて身は輕く。天が下をば笠宿り。印の笠も三がい坊と行方。定めず別れけり。

第　二

地小善は益なしとして爲ざる故に善積ますして名を成す事なく。小惡は害なしとして去らざる故に惡積つて身を滅す。爰に奧州泰衡が弟四郎高衡。仙術を學び兄弟討死の劍の下。腦に矢疵を受けながら。鎌倉勢の目を眩し霧に隱れ水に棲む。蛙の聲の囂き。伊香保の沼のいかゞしてフシ　東路を遁れ出で。　地今は都に樣を變へ。荷ふ枕は細けれど心は太き大望。來る時節を松茸ぞ。　詞茸松茸午蒡山の芋青豆生蕨コン。　人蓼葉人蓼やィ。　地選人蓼は立身の後藥病七草四郎と呼ばれ。利にかまはねば算用も大宮通を櫛笥町。行き拔けの裏貸家小家は口の嵯峨松茸。フシ松茸ざうと賣りにける。　地笹垣したる小座敷より松茸買はう。おういと答へて管嵯簏。顏差入るれば四十許りに鰥ある男。能く見れば昔の郎等獅々木佐仲太。内よりも小手招きつつと通つて是は〳〵。　詞いつから爰にぞ。されば申し鎌倉より浪人改めとして。足立右馬之允富樫の左衛門上京致せし故彼の七條通の家を追立てられ。十日許り以前に是へ移り則ち今日宿茶と申して。家主始め相貸家中へ酒を盛る約束。　地是ぞ幸の參會。相借屋中婆喚迄も勸め込む企。扨其許の御首尾ども承りたしとぞ申

しける。詞四郎打笑み。久々の對面に吉左右聞いて滿足。此の方にも油斷なく。コレ此の如く色々に樣を變へ町人百姓勸め込み。別けて當所島原の傾城。更級といふ太夫。牝の親は智謀ある武士の浪人と聞及ぶ。先づ頃より島原に通ひ更級に馴染み。近々に請出す極め。時には親とは智慧。因を以て我が法に勸め込む程ならば外の人百人埒り。地其方も隨分精出せ愚痴な女童等勸め込めば。智ある者も妻子に連るゝ慾の世の中。兎角金を撒き散らせと。籠の底なる山の芋でびつくり足つく革袋。詞又此の鏡は師より授かる秘密の鏡。裏表に仔細あり能く見別けて人に拜ませば。地如何なる者も曉喜すべしヤ。詞隣は壁一重シイ〳〵。地此の荷は爰に置いてくれ是から直に島原。なんと身が差替への刀爰にもあるか。如何にも〳〵大小お小袖お羽織も戸棚に入れて奥の間で。召替へられいと案内する間に東隣の雇ひ嚊。いそがしげに申し〳〵。詞お家主殿始め長屋中殘らずつらりツと觸れました。どれも皆お出での筈。ハア、たんと青物召したどれ午蒡洗はう。人蓙揃よと躍へばば。いや〳〵皆お出でなされて手づからの切り刻みも一つの馳走。地其の儘置いてま一遍廻つて呉う存じますというて。ま一遍廻つて追付けお出でなされと。二三遍も四五遍も目ぢ舞ふ程廻つてたも。ヲシ早う早うと追出し。地サア〳〵人は無い此の際にと四郎が忍ぶ變へ姿。坂東武士の荒育ちも此の頃京にすみ前髪。深編笠の歩みぶり。人蓙午蒡の土氣放れて島原風の。ヲシ拔萃なり。地程なく大矢野松右衛門先に立ち。相貸家の女夫連日傭手間取。謠の師匠鍼按摩久庵洗ひ物師の蛇の目後家。鹿の子結ひのお雪が嗅打連れ立つて。詞今日は御遣作お鮮宜申す筈なれど。お親みのため拙者は一軒彼方の藪醫。藥を盛つても違ふゆる森宗以と申す者。地我等が商寶こがしにて山善平自髪天窓の額にちよつと。私は戀路の商寶殿達方はふツとつつに出逢うて。大きな腹を持ちかけられまい物でもない。此の指二本でおろす程にける程に。藥研婆と申しますと。心々の挨拶咄。ヲシ乘合舟の如くなり。地打揃うて呉い獨り住みの我等。御馳走は心ばかりゆるりとお咄し。先づお茶一つと釜の下焚付け。詞此の頃下値な薪求めしが各もお買ひなされ。地德な物と小隅より彌陀藥師觀音なんど。木佛五六體繩からげ引つ解き。小鉋取りのべめッき〳〵とうとうめき〳〵。釋迦も地藏も大日も。共に阿彌陀の四十八割碎きて釜の下。煙に咽ぶ觀世音枯れたる木とて火花咲く。いづれか火坑變成池一座の男女色違へ。胴頓ひ冷汗しハッ〳〵ヲシはつと驚くばかりなり。地大矢野松右衛門腕を取つてこりやや佐仲太。詞面々二世を賴む本尊。地佛を侮るばかりでない。人をうつけにするは醉狂か亂氣かと。聞きもあへずから〳〵と笑ひ。詞さういふ各が醉狂よ亂氣よ。念佛申す乞食非人

幾人かあれども。終に乞食を遁れず のたれ死。各が明暮彌陀よ釋迦よ。觀音よと。經讀み念佛召さるゝがどれ。金持になつたか大名に成つたか。其の儘裏屋住み。未來活計歡樂の便宜聞いた者一人もなし。地佛法に騙され億萬劫身を苦しむる人々に。今宵の御馳走我等が本尊拜させん。近く寄つて拜まれよと脇子の戸開けばこは如何に。木の葉を着たる荒法師。雲に乘じ口より虹を吹く繪像。ヲ、ざんない佛樣やと一同にッシ南無阿彌陀佛と唱へける。詞佐仲太怒つていまゝ〳〵し念佛。忝くも此の本尊は九郎判官殿の家臣。常陸坊海尊仙人。長生不死の術を學びて。歡樂無苦の仙人と成り給ふ。其の法を今傳へし人は奥州五十四郡の主。秀衡の四男今の名は七草四郎殿。此の法に信服し神も佛も打捨て。一心不亂に仙術に傾く人は病苦なく貧苦なく。金銀米錢に飽き充ち。國主城主公家高家にも望み次第。地保つ壽命は一千歳無二無上の大法。此の法に信じ趨く人には。當座の褒美に與ゆる黄金是なりと。革袋開き積み重ね。辯を並べて勸むれば。愚痴無智の男女氣を奪はれッシ心迷ひて見えにける。詞痛はしや方々。佛に誑され畜生道に沈んだる證。仙人の明鏡に照らされ佛法の罪顯るゝ其の證據と。地祕密の鏡の裏を開いて棚にかけ。サア主主の顔を見よあつと各押合ひへし合ひ。鏡に向へば情なや我等が顔は馬に成つたかこちや牛ぢや。私や犬か狐に成つた。猫ぢや鯔ぢやあさましや悲しや。皆畜生に成り果てたエ、阿彌陀めに騙された。助け給へ仙人樣教を受けて只今より。法を持ち奉らんと皆々一度に手を合せッシ随喜の涙限りなし。詞扨は家主殿始め一念發起なされしに偽はないか。地座敷なりの間に合に心に偽ありとても。鏡に念度顯るゝなんと〳〵と言ひければ。詞アヽ御勿體なや。あらたな奇瑞を拜みながら。疑の念恐ろしや。地許させ給へと平伏す有樣。詞ヲヽ果報者達目出度い〳〵。然らば向後法の爲には命を惜まず。七草四郎殿へ從ひ奉らんとの連判の上。地直に金子を與ゆると卷物出せば一座の男女。一言とも言はず我先にと印判書判或は爪形筆の軸。指先より血を出し徒黨固たまる決定心。サア御褒美と十兩包ぐわらり〳〵と投げ出せば。我劣らじと立重り。戴く拜む木綿襦袢の懐に。今日ぞ始めて陸奥のッシ黄金の花ぞ咲きにける。地かゝる所に町の番太慌しく。詞申し〳〵松右衛門樣浪人の改めとて。富樫殿の御内柳瀬權藤六といふお侍。大勢連れて地はや爰へと。呼ばはる中に權藤六つつと入り。詞七草四郎が徒黨獅子木佐仲太とは其の方な。嫌倉殿の仰を以て尋ぬる事あり動くなと。地奥に踏ん込み是何だ。惡魔の形か化物か人民を誑す惡人めと。繪像おつ取り引裂く所を佐仲太飛びかゝり。しや物見せんと掾先にどうと投付くる。詞狼藉者切れ括れと抜連れて取卷いたり。佐仲太大音あげ。仙術

の大敵今日歸狀の人々。あれ撲殺し四郎殿の御慮に預れやつと下知すれば。地大江千東森大矢野隣の妙心向ひのお爺。尼も沙彌も枕より棒熊手蔦口。横槌捕木提け〳〵減法やたら。追つつ返しつ喚きしは犬の嚙み合ふ 三重〳〵 如くなり。地案内知らぬ真屋の奥。溝に踏ん込み井筒に躓き下部が腰骨膝の皿。權藤六も眞甲割られ。フシ塵捨場にのめり伏したりけり。地佐仲太徒黨に勇みを付けお手柄〳〵。詞仙術の末繁昌さりながら。役人を殺しては跡がむつかし。家財諸道具取納めすはと言はば。我等一所に立退く用意肝要。先づ各の發起心佛法の罪消え失せ。御本尊仙人御受納の證拜ませんと。地鏡をひらりと表にかへし サア禮拜々々と。聲に從ひ立ちかゝり向へば映る畜生の。彩引換へて玉の冠玉の 弁 フシ恐怒柔和の。地天人天女の顏容あり〳〵。アヽ有難や命を捨てゝ惜しからぬ。南無仙人樣仙人樣と夕月に鐘も。暮れ行く 三重〳〵 雲の足。出口の柳。こき交ぜて。松と梅との縱緯に戀を。冷泉織出す。島原や。ぞめきは檢を綜るに似て 小オタリ 町の。六筋に結ほれ絲の。いとしからぬは フシなき中に。別きて名に照る更級とて。桔梗が本の太夫職七草四郎が思ひ草。俄に根引極りて。さらばやいのの暇乞。今日突出の妹女郎唐琴を引連れて。揚屋々々を顏見せと。廓名殘の二道中。長地品は變れど一つ前摑みからけに脛見えて。裾に露散る玉川屋。馴染の揚屋に入りにける。地ソリヤ唐琴さん更級さん御出でと。家内喚けば亭主立出で。詞ハテヽ見事新造樣。廓廣しと申せども恐らく〳〵御全盛の折紙道具。扨目出度いは更級樣。言ひ出す其の日に身請とは傾國開闢の初物。地手形の埒もさつぱり七草樣も疾うから御出で。あの二階に長う短う待たせまするも今日ばかり。明日から鼻を突合せ。春は早々七種菁の若生え。とゝかゝ〳〵おぎやあ〳〵を聞きませう。千秋樂と フシ取囃せば。詞よう祝うて下さんした。今宵廓を出ると思へば嬉しい半分名殘も半分。心殘りは此の新造の唐琴殿。生れは遠國京には知るべ所緣もなし。私とても馴染なければも眞實の妹のやうにいとしうて。地此の度の水揚も七草さんのお世話にかけ。二十日も三十日も引廻す心でありしかど。詞私は身請今日限りさぞ力があるまい。今宵からでも粹なお客を引付けて貰はして下さんせ。行末かけて賴むぞえ。廓の名殘唐琴殿。地主さんいざ酒にしようぢやあるまいか。そりや酒との御託宣神は二階へ上らせ給へ。兎茶御神酒〳〵。我等は酒の神主と フシ戯れ勝手へ立出づる。二階は名殘の一節を。歌月は笠きて西へと急ぐ。とつつく御供の踏奴。朱雀細道とび足どつこい。押せやれどつこい。露は嵐にちりつてとん。ハルフシ三筋の絲の。地音に引かれ末社はいきつて先走り。玉川屋に大聲上げ。大壺お出でと鳴込めば亭主はお迎ひ門口に。這ひ踞ふを目もやらず。

座敷にのさ〳〵富樫の左衛門膝を捲つて大胡座。詞汝や亜主か。大名の名は隠しても知れるもの言ふに及ばず。身は富樫の左衛門宗重さ。公用の憂さ晴し傾城狂ひに來りしなど沙汰は無用。今此の里の名に高き。花月高尾吳羽なんと堪らぬ妓と聞及ぶ。地此の内際なを今宵の縁それ フシ引つ攝めと言ひければ。詞仰の君達誰方も指合まだ四五日もお際なし。幸ひ今日突出し女郎。唐琴様と申す太夫職旦那の威勢で貰ひませうか。突出しとはまだ手入らずな。地珍重珍重コリヤ働けと投出す。くれぬ粋より遣る野暮に廻りの強い花車。旦那くわつと見事な儀。追付けお供と罷立ちざゝめき騒ぎの最中二階。上り氣に成つて富樫の左衛門。座敷にとほんと待つ間程なく亭主二階を飛んで下り。首尾よう貰ひ新造様それお出でと。聲に引かるゝ唐琴が。知らぬ男に フシ顔曝す。幸いぞ憂いぞ此の身に成つて悔しや。フシ玉手箱梯子。半分下りて思はずも。宗重に目を見合せ。くわつと驚く氣にこたへ下りも。上りもスエテ足も心も踏み迷ふ。地目かど強き富樫の左衛門つつと寄つて腰抱き締め。詞ヤア珍しい。念力かけたる葛西の郡司が娘琵琶の姫。何としてのお傾城。地外遊へて黄金の釜の掘出し物。請出して身が御前様ヤイ亭主。唐琴が身請十萬兩でも引かぬ大名。早く往せて埒明けいと呼ばはれば琵琶の姫。詞エ、聞きにくい胸が悪い宗重。右馬之允様とは。夫婦で夫婦に成り悪い。武士の義理。傾城は遊びもの。寝ても逢うても我が夫の。名字に瑕は付かぬと思ひ人置きの縁を求め。地今日始めて此の里に唐琴といふ浮名を取るも。右馬之允殿に一夜なりとも逢はんばつかり。詞安宅の關守門番づれが。唐琴を身請とは些とすしなぞ推參なぞ。地エィけたいの悪いと聞くより富樫くわつとせき上げ。ずんと立つて引摺り下し髪攝んで。門番づれと吐した此の頬けた拇り歪めてくれんと。振上ぐる腕首しかと取り。エ、悟や待て汝というたばかり詮方なく。腕にほつかりちぎれてのけと喰ひ付かれ。宗重堪らず振放し汝女め嬶も情も是迄と。すばと抜いて打ちかくる。ヲ、切殺せ死ぬとも獨りは死ぬまいと氣は逸つても及物はなし。抜けつ フシ潜つつ女業。七草聞付け梯子ぐわた〳〵烏より輕く裾はし折つてつつと入り。富樫が持つたる柄共に脈も切れよと腕捻上げ。取つて引つ据ゑ大小搦いでぐわらりと投げ。詞新造を貰ひ度しと亭主が段々の願ひ。此の里の遊興は互づくと料簡してくれたるに。尾龍至極の及物だて冥加知らず間當り。地此の臨骨を戴けと獣上る足首踏まれじものと富樫の左衛門。しさつて見れば右の膝口に尖り矢の鉈あり〳〵と。四郎が繪圖に少しも違はず。彼奴四郎高衡ごさんあれ。大勢催し生捕らん。してやつたりと心も勇み。フシ逃げて往なんと身をもがく。地唐琴も立廻りに同じく見付くる矢鉈の跡。ヤア汝

は奥州の四郎と言はんとせしがちやつと言ひかへ。詞汝は四郎。素人な傾城と侮つて我儘いふな。彼方へ詫言して取らす重ねて爰へ足ぶみすな。地もう堪へてやらんせと七草が手を取り引退くれば。宗重むくむく起上り。脱んで見ても彼奴が面付たゞ者ならず。仕損じて我が命のがれ刀も脇差も。捨てて跡も見返らず フシ足をばかりに駈出す。地七草何の氣も付かず新造何處も痛まぬか。さり乍ら痛い目するも水揚の祝儀祝儀と打笑ひ。二階へ上る後影見上げ見下し。嬉しや富樫は往なせたり。我が手にかけて四郎が首取り。父の恥辱を雪げば葛西の家の武士立つて。思ふ夫と比翼連理。佛神の宛行。富樫が捨てたる刀取つて落し差。落しつけても心逸りに身はわな〳〵。よろつく足を踏み締むれば板間はめつきりめつきめき。氷を渡り火を踏む思ひにて。窺ひ上る箱梯子。明けんとするに手は顫ひ嵐の叩く襖戸はごと〳〵〳〵〳〵。さら〳〵〳〵さつと明くれば更級が。此方へ出づる姿を見てあつと飛ぶやら走るやら。元の所に身を縮め フシいとど頸ひぞ増りける。更級立寄り。詞合點いかぬ新造殿。女の際に刀差いて二階へ上り。誰に恨みで誰を切る。譯も無い事仕出して身を失はうといふ事か。人の知らぬ中私にそつと心底明かしや。かういふも其方がいとしさ。誓文くされ明日出る廓を得出す。居腐りにする法もあれ何なりとも聞分け。腹の癒るやうに肝煎らう。心を鎮めて腹の立つ一通語つて聞かしや。地なうゝとまし人やと小聲になつて頷むれども。只あい〳〵と フシばかりにて暫し。詞もなかりしが。詞更級さんにさし當てて どうも言ひ悪けれど。御哲女が忝いこれ。人に恨みも腹立も何にもない。此方を請出す七草を切るわいの。ヤアヽウそりや。何故にヲヽ肝の潰れる筈。私には幼いより許嫁の男あれども。言ふに言はれぬ障あつて添ふ事ならぬ。今でも七草の首を切れば。障も晴れて夫婦に成る。餘りわりない事ながら女は互。此方は神の結ぶ縁の男。深い仲でも七草は請出す金の男。地サアひそひそいふも漏れてはならぬと駈出す。先づ待つてたもとに縋り。詞七草様を金の男と氣が付いたれば面白い。私も眞實來世迄と契約の男がある。鎌倉に隠れもない。葛西の源六清治殿。何と肝が潰れるか。おいとしや私故父御の御勘當。地佇む方のあるも知れず。逢ひ度い見度い添ひ度いと思ふばかりに過ぎ行く月日。憂きふしに責められ年を切り増し〳〵廓の網が重り。源六様に添ふ時節は無い所に。詞思ひも寄らぬ七草様ンが請出してくれうやれ忝い。此の廓さへ出たらば。地心あつて暇をくれずば逃げても走つても。逢には源六様に添はうものと思ふ頼みの七草さん。此の金の男に別るゝは。眞實の男源六さんに別るゝも同じ事。誓文の罰當らば當れ。是ばつかりは料簡して貰はねばならぬと手強き詞。唐琴鬻き扨

は兄源六樣のと言はんとせしがいや〳〵。傾城は賢しく人の上を我が上に言ひなして。難を遁るゝも知れぬ事。言はぬ所と分別し。飼これ更級さん。料簡して貰はうとはあちらこちら。料簡はそつちにあり。サア料簡して下さんせ。イヤそつちに無ければこつちにも料簡ない。七草さんの代りに。此の更級が首取らんせ是が料簡々々。なう慮外ながら此の唐琴は武士の娘さうは猟狼へぬ。斬るべき者は得斬らず。役にも立たぬこなさん斬つては。飼犬猫斬つたも同然と。いふより更級富樫が脇指。取つてほつ込み裾小短かに帶引上げ。犬猫斬つたも同然とは誰が事いうた。地傾城の先祖をいふは恥なれど。浪人でこそあれ我が親は。朝日將軍木曾殿の御家老筋手塚の何某。請出さるゝは嫁入の心。幾干悦ぶ今日の今宵。あたゝかに七草さんに指もさせぬ。身請の土産に其方が首を持つて行く。地サア來いと抜放せば。エ、小ざかしう邪魔する女用捨は無いと渡り合ひ。互に年も相生の松と松との共擦れに。餘所を忍びて聲立てず打手も知らず力は無し。ひらめく紅絹裏劔の光。目鼻の先にひら〳〵と。フシ亂れ散るこそ危けれ。地四郎聞付け。何をあがく傾城めらとひらりと飛下り。ほでてんがう置きをれと二人が刀踏落し。唐琴が項ひつつまんで投退け。飼ひそ〳〵ぬかすをろくには聞かねども。七草が首欲しいとな。我が首は知行になる國にも成る。金にも成るによつて日本國の武士が皆欲しがる。いかな〳〵。萬民を蹂け王法を奪ひ四海を一呑と思ふ七草。我律を行はば。廓中の殿火を一度に打消し。長夜の闇となす程の某。うぬらが腕には推參。捻り殺すは易けれども纏の事には大義の妨。雀威して鵠失はんよりはと命を助けた。これ更級。地あいつ一人物に狂はせ今宵廓の名殘の床。サアおじや〳〵と打連れ上る二階より。踏鎭めたる氣の强さ言ひ伏せられて琵琶の姫。息せい張つたかひもなく。エ、口惜しの身の上やと。スエテ涙。五體を絞りしが。地どうでも今宵は通されずヲ、それよ。右馬之允樣富樫共に在京なり。告げ知らせて討たせんもの屋敷を尋ね一走に往てくれう。ア、よも大門は通すまじとやせんかくやと分別も。築山のゐざり松塀に蹿きし片枝は天の敎へ。塀の外は朱雀道。枝傳ひにと思ひ込んだる植込は。目指すも知らぬ闇こそよけれ松が枝に。傳ひ登るも。わぢ〳〵〳〵顚へばふるひ落されて。枝の露ふる年ふる松を飛下りんと向ふを見れば。數十本の高提灯こは如何に。丸に梅鉢富樫が紋南無三寶。最前四郎を見付け右馬之允殿を出し抜きの抜駈な。彼奴に先を越されては夫も恥辱望も絶ゆる。天道も神佛も何が憎いぞ何の崇り。かう迄運も盡くるものか無念口惜しやと。塀の屋根に抱き付き聲をも立てず泣居たり。いやいや泣いても叶はず踏込んで。四郎めと死なんものと塀をひらりと。フシ飛下りたり。地

程なく富樫組子組下百人ばかり提灯四方をおつ取巻き。 ㊀奥州の四郎高衡を召捕れと鎌倉殿の御諚によつて。富樫の左衛門向うたり出合へやつと呼はれば。 地廓中は子を逆様。遣手禿は泣き喚き上を下へと返す所に。コハリ不思議や風も吹かぬに提灯燈火残らず一度にぱつと消え。ナホス前後も見えぬ眞暗闇虚空は人馬馳せ散る音。松吹く風は関の聲。大地の震動鐵砲をつるべ放つ如くにて。揚屋の座敷は忽ちに フシ島原陣ともいひつべし。 地四郎更殺手を引合ひ。左衛門が鼻の先暗廻れども知らばこそ。暗いぞ〳〵同士討すな二三人づつ立別れ。聲をかけて驅出せと フシうろ〳〵四方に別れける。 地四郎嘯き時分はよいぞ更殺。辻の門より木へ登り。東寺の塔を目あてに屋根傳ひにはや落ちよ。いや暗うて何處も見えませぬ。ハテよい頃に明を見せる。心得溜桶踏まへて取付く垂木ばな。軒端に裾を引つかけて危や轉びこけら葺き。見上げて行ふ四郎が術消えたる提灯一時にはらはら〳〵。くわつと點り フシ宛然晝の如くなり。 ㊀あれこそ四郎。餘すな逃すな搦め取れと。大勢どつと取巻くを。 地少しも動ぜず屋根に向つて吐く息は 黄赤白紫に。渡せる橋はなんの虹ぞや問へど答へず目の前に。四郎が形は搔き消す如く虹のとまりは屋の棟に。其の魂は更殺と共に連れ立ち飛ぶ蛙。あれ打殺せと拳を握り礫よ石よと騒ぐ聞に。影も遙かに遠ざかり行き方。更に白雲の。棚曳き響く夜明の鐘。音に聞きたり唐土に。形を吹出す鐵枴仙。蛙を愛せし蝦蟇仙人の ギン法を傳へて末の世に目をおど。ろかすばかりなり。

第三

地花に鳴く鶯は聲に笙篁の調をなし。桐の古木の丸木橋それさへ琴の音に通ふ。されば當今後鳥羽の聖主。月待つ夜半の管絃の御遊。風俗催馬樂朗詠も殊麗深き聲漏れて。主殿司の立てあかし光の數も百數や。大宮人の袖はえて雲井に響く絲竹の。 フシ直なる御遊樂めり。 地足立右馬之允景久浪人詮議の在京の序。禁中非常の守護仕れと宣旨によつて。萩の戸の賢子に伺候して見廻せば。鎌倉の勤番とは事變り。御格子あけ渡して御簾の隙々漏り來る上薦の。衣のおとなひ フシはら〳〵と。蘭麝の匂。打薫り。 地聞き馴れぬ物の音も流れに響く御溝水。流泉啄木の曲を操るとは。スエテかゝる事をや夕立の。地空さりげなく澄む月に。御池の蛙二つ三つ鳴き出せば七つ八つ。次第々々の諸聲は扨騒しし蛇ばし出たるか。何にもせよ喧しし。御座に響かば御遊の妨げこゝらが御番の心掛。追散らし叡慮に預らんと。袴のそば挾んで聲をしるべに御垣が原の。ウタと柳の翠蔭深き。御池の澤潟杜若。あやめも別かぬ水籠に。這出づる蛙幾千萬。數も限りもあら夥し フシ凄じや。 地池水を東西にさかつて立別れ。萍水草に飛びかふ有様目を驚かすばかりなり。是なん

蝦蟇合戦といふ物な。昔には聞けど目に見始め。いて奏聞と立歸りしが。詞いや〳〵御遊の興さまし。地始終をとつくと見屆け御尋の時奏せんと。ワキ眼もふらず守りゐる。地池の面は、漣高く左に備へし蝦蟇の陣。コハリ一逆一順長蛇の如く頭を打てば尾に纏ひ。尾先を打たば頭に包む首尾を計つて控へたり。ナホス右は水火木金土。五行の陣勢あり〳〵と中にも尺除の コハリ大蝦蟇。これ大將といひつべくのたり。〳〵と現れ出て互に齒をとぎ瞬せず。兩方睨む蟇目の光矢を射る如く輝けば。數萬の蝦蟇聲はかり鳴立て。〳〵さながら関の聲。入違へ入亂れ喰ひつ。喰はれつ飛び違へ追廻し。即座に死ぬるは捨てかへる。賦倒されて起きかへる。脳を嚙まれてちんがちがちんば引くひきかへる。身内は血みどろ赤かいる。追はれて色も青かいる弱れば手もなく川中であまかへる。跡をも見ずして逃けかへる。手負は背に助け乗せよい。〳〵〳〵。〳〵飛んでかへるもあり石を蹴飛ばし砂を蹴立て。奥には篳篥を吹く。爰には虹を吹立て〳〵蛙の歌は引換へて。がまんの池波岸打つ音。ナホス一足去らず喰合ひしは凄じくも亦 三頭へ不思議なり。地池水變じて紅にさしもの景久氣を奪はれ。うつとりと見とれ休らへば。又一しきり雨交にどつと落ち來る嵐につれ。御殿俄に動搖しありつる蛙は行方なく消えて。形はなかりけり。地御遊も半に打止みて。上達部上童立騒ぎ。詞戦に御惱御典藥よ占方よとひそめく聲々。地只事ならずと景久慎み宿直守る所に、鎌倉の傳奏吉田の中納言經房卿立出で。右馬之允を召され。詞今宵非常の宿直はお事よな。只今蛙の鳴聲御耳に入ると等しく。玉體火熱以の外の御惱不思議千萬。御池の邊見て參れと宣へば。景久謹んで。重ねて見申すに及ばず。御池の蛙數十萬兩方に屯を構へ。互に喰合ひ爭ふ有樣正しく闘諍合戦の勢。地池水も血汐となし風雨震動して消失せし有樣。具に見屆け候と申し上ぐれば。詞經房卿横手を打つて。疑もなく蛙軍。唐土にて漢の武帝元鼎五年蛙闘つて北狄起り。本朝にては推古の御代蛙闘つて蝦夷の一族謀叛せり。地何れも不吉の例殊に主上御夢に。詞仙人日月を踏んで虹を吐くと御覽ぜし。蛙の吹く息虹と成ると陰陽の 理 に違はず。地今宵の御惱此の障碍疑なし。然るに七草四郎といふ者蝦蟇仙人が法を傳へ。樣々の幻術を以て萬民を惑はす。もと此の四郎は鎌戸の太郎が弟。武士の浪人ならずや。富樫と御分浪人詮議に在京して。地など四郎は捕へぬぞフシ油斷ありとぞ仰せける。右馬之允承り。詞御役疎略致さねども。彼の四郎形を種々に變じ人力に及ばず。然るに島原の傾城更級と申す女を相具し。夫婦共に行方知れず候故。地此の更級が親手塚幡樂と申す者。詞江州志賀の里に隱者と成つて遁れ住む由承り。密に召捕り尋ね問はんと存じ。忍び

の者を遣して候と。地申しもあへぬに大理の廳の官人罷出で。詞足立殿の手の者手塚幡樂を召捕り參り候と訴ふれば。地幸ひ幸ひ傳奏の御前にて糺問せん。是へ引かせよあつと答へて埋門の扉を開けば七十許り。頭の雪に埋れ木の。いつの花實と存らへて一度は子故に悅び一度は。子故にぞ苦しき今の縛り繩。フシ御前に引据ゆる。地右馬之允階下に立ち。詞幡樂が娘遊女更級。七草四郎に相具し夫婦共に行方なし。汝は親子聖旨能く知つつらん。ありの儘に申せ斯くいふは足立右馬之允景久。堂上に在すは吉田の中納言經房卿。武家の傳奏鎌倉殿の御前も同然。陳ずればいやながら拷問するぞとありければ。幡樂顏を上げ。事あたらしき御尋ね。娘を賣つて命を繋ぐはさながら我が子の肉を喰ふ人外畜類に同じき某。起請誓紙を以て申すともよも誠とは思召すまじさり乍ら。水責火責の拷問に逢ふとても。存ぜぬ事は存ぜぬと申すより外詞なし。地永く御疑ひ受けんよりとく〳〵白髮首刎ねられよ。詞ハテ扨此の御尋ねと候はば早速進んで參るべきに。宿所を賺し出し道にて繩をかけ。盜賊の體に成りし事。地一生の殘念これ一つと。詞淸しく目の中にスエテ無念涙ぞ浮みける。詞經房卿聞き給ひあれ聞かれよ右馬之允。幡樂が僞なき心底詞の色に顯れたり。如何に老人。汝は助け歸すべし。七草四郎は朝敵といひ天下の大罪人。在所を知らば告げ來れ。汝等夫婦が命を助け。急度御褒美せらるべきぞと宣へば。幡樂居丈高に成り。人を御覽じ違へしな。たとへ四郎が聟でない。他人なればとて命助かり御褒美に引かれ。訴人する幡樂に候はず。親子三人同罪なれども。國靜謐の爲とあるならば遁れても遁れぬ大罪人。見付け次第聞き次第訴人いたす儀もあるべし。地いや只事むつかし。所詮首を刎ねられよと。思ひ切つたる顏色に右馬之允おつ取つて。詞尤々。上には長袖御慈悲餘つての御意。一天の帝並に武將鎌倉殿へ忠節を盡し。名を殘す老の本望として訴人せられよ。地連る緣の同罪其の方とても遁れぬ所。天下國家のため命を捨てられよ賴入るといひければ。詞ム、一命をくれよ賴むとの詞。僞りなくば右馬之允殿御誓言。フ、再び鎧を肩にかけず鎧の柄握らず弓矢取るまじ。地それ繩解け詮議は是迄幡樂罷立て〳〵と。下知に從ひ繩取が解いたる繩を幡樂取つて手にたぐり。詞エ、あはれ我が身の未來記を知るならば。とつく親子三人飢につかれ死なんもの。地貧苦に責められ詮方なさ。娘に乞食の憂き目を見せん不便さ。傾城の身は男づれ如何なる果報もあるものと。可愛さ故に子を賣りて。末頼もしく フシ思ひしに。地引替へ男の緣につれ今は天下の科人と成り。親は訴人の身と成つて親の解かれし此の繩の。聟と娘にかゝるべき因果の禍是なりと。大地にはたと打付け。お暇申すと首を下げ涙を白洲にすり付け〳〵押隱し。

莞爾と笑ひ立歸る尾羽は枯れても荒果てても。昔ながらの武士の道。立つる詞の花園や志賀の。里へぞ 三重へ行く先も。住めば都の名に古りしフシ志賀の浦波。餘情なき。地 隱者住居の フシ離れ庵。地 主幡樂は大内の召によつて京上り。年寄つても女の留守寢ても夜の目をまんじりとも。明六つ五つ 小オクリ 四つに。過ぐれば今日でもないか待遠やと。戸口に立つて西東見廻す外面の藪垣。詞 是は是は何處の野良犬が破りしぞ。たつた一夜の夫の留守犬迄婆を侮る。地 憎や〳〵と小竹捻寄せ押縮ね。結ぶ繩ふし竹の節。フシ 是も世に住む憂きふしなり。地 急ぐ心に幡樂が任せぬ足を漸に。歸り着いたる我が屋の門。詞 なうお歸りか待兼ねし 瀧籠にでも乘りはせず。地 先づ〳〵内裏の御用とは何事ぞやと言へども答へず。詞 お婆垣を結ひ圍して何時迄の栖家。ごくにも立たぬ事する人と。地 いひ捨て通れば續いて入り。詞 今の五音は氣にかゝる九年十年顏見ぬ娘が身請したけな。近々に夫婦連で來るであらう。地 障子の破れも繕ひくれと内を出る迄いふた人。戻り〳〵浮世捨てたいひ樣は。何事が出來ましたと問へば幡樂打笑ひ。詞 人間世は天地と同じく今迄照る日が俄に雨に成る如く。昨日思ひし事今日變る。變易の理に喟ければ時々驚く。必ず肝潰さるな身は今日腹切つて死ぬると 地 聞きもあへずヤア、定めなき世の習ひとも大抵の事かいの。譯を聞いてこちの胸も定め度い。仔細を語つて下されと心を揉めば。されば〳〵。詞 長う言うて詮ない事。つまる所は娘が夫。七草四郎は王法を覆す天下の朝敵。見聞き次第夫婦共に訴人致せと。禁中北の陣とやらんいふ所。鑄倉殿御名代の公家衆。足立右馬之允といふ武士の大名と。理を詰め義を立て問答の上。地 更級とも七草とも耳に入るか目に見れば。ちつとも庇ひ贔す事ならぬやうに成り切つた。なればとて幼いより人手にかけ。苦勞させた娘何の科何の恨に繩をかけ。是首切れよとて出されうか。身こそ貧なれ武士の道を守りつめ。ひけを取らず戰られず。七十の老の坂浮世の峠を踏越え。此の上に何處の高嶺何國の峰。何の目あての花もなし。生きる程業曝しと思ひ極め切る腹。かくいふ中も因果のめぐり娘が來ない物でない。持佛に燈明香立ててたも。本來空の故鄕へ歸る旅立せんと座を立つを縋りとめ。詞 聞く中から私は死んで居る。子故に死ぬるは父も母も同じ事。五十餘年連添ふ仲獨り殘れか怨めしや。地 此の春の便に親達の寢巻にと。くれし古着の白小袖 地 着れば親子連立つ心。共に〳〵と思ひ極めし涙の目許。詞 道理々々母の身でまだ〳〵存らへ悲しい目も見られまい。同じ刃と覺悟めさと。地 内より門の戸錠卸せば女房持佛に火を揭げ。燻らす香も我が命も。消ゆる間近き薄煙ォクリ 打連れ。納戸に入りにけり。フシ 折もこそあれ。更級が。地 忍ぶ手綿の頰被り。道

を問ひ〳〵家をとひ見知りは元の藪垣。走り着いても戸は明かず。押したり引いたりしやくつたり。聲を細めて母様申し。詞しながら來ました父様更級でござんすと。地いへども更に音もせず。ムゝ寺參りなされしか。詞外には錠も卸さず。内で締まるやうに賢いからくり愛で待たう。地早う歸つて下されかしと フシ待つ間や心せかるらん。地父母かくとも白小袖に涙をかけてくどくどと。詞可愛や娘が模様の物は廓風。派手でお氣に入るまじ此方や母が好いたやうに。染めて着よと孝行でくれしもの。地血に染めるとは思ふまいと悔み歎けばお婆。詞愚痴な事言はずとも此の態見や。二人の死骸を人が見て。幡樂が浮氣な心中したといふであらう。若し草双紙に作らば外題は心中友白髮と。地命を塵とも最期の戯言 フシ心健氣に哀れなり。これ朝暮頼みし觀世音普門品一品讀誦し。御經の終りが命の終り女夫が顔の見納め。隨分小聲に〳〵と顔も涙も同音に。詞種々重罪五逆消滅自他平等。妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五 爾時無盡意菩薩即從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩以何因緣名觀世音佛告無盡意菩薩と地吹き來る。本フシ風が取次ぐ經の聲。詞ヤアお二人の看經か。申し父様母様羨ましいと思ひけて下さんせと。地呼ばはるも親子の緣。胸に響きて母はきよつきよと耳欹て。父は紛らし聞かせじと涙に咽ぶ聲張上げ。詞一心稱名觀世音菩薩即時觀其地音聲の高く成る程あこがれて。これ娘か來ました娘ぢや明けて下さんせ。詞悲しやあれ娘といふわいの。イヤ娘が何の來るものぞ。娘ではない。無盡意菩薩無量百千萬億に地思ひを碎く夫婦の歎き。フシ御經も跡や先。地堪へ兼ねて厩出づる母。帶を控へて止むる父。泣く〳〵念彼觀音力振放して走り出でて戸に取付き。詞悲しい所へおぢやつたの。其方の夫四郎は國を騷がす大惡人。連れ添ふそもじも一所に見付け次第。縛つて出せと鎌倉殿の御意が出て。いとしや廣い世界を狭い身になりやつた。地何とぞ身を遁れて一日も命生きてたも。それに增す孝行ない慘い目が見ともなさ。父も母も今死ぬる。二親の命日忘れず夫は佛法削るとも。そつと隱して回向しや。それが身の冥加身の光とも成るぞいの。父様は武士の義理一言も交されぬ。詞サア今が最期念佛唱へてはや歸りや。地エ、門の戸一重隔てて十年ぶりの娘が顔。見ずに死ぬる悲しやとわつと叫びて入りければ。なう母様待つて下さんせ。詞四郎は私が男でない。本の男は別にある。七草とは緣を切る譯を言ひに來ました。地必ず死ぬまい〳〵と苛ち喚けば幡樂聞付け。詞何ぢや四郎と緣を切るとは嘘ぢやないか誠か。なんの嘘いひましよ男は別に有るわいの。それが定なりや娘一人拾うたと。悅び勇み飛んで下り錠明けるやら捻切るやら。親子が顔を見合せて扨も大きう成つたの。ホウヨウいかい白

髪にならしやんしたと。三人手を取り縋り合ひ嬉しとも戀しとも。わきて別ちも泣く涙 フシ思ひ遣るさへ哀れなり。 扨四郎が外に眞實の男とは。京都の町人か但し百姓か。いや〳〵今流浪の身とはいひながら。鎌倉大名葛西の源六清治殿。内裏大番の御在京に馴染を重ね。末々堅い約束迄致せしが。御親父様の勘當にて逢瀬も便りも絶えし折しも。七草四郎が請出す談合。やれ嬉しや此の里をさへ出たらば。地歎きをいうて暇を取り源六様に添はんものと。隨分廻つて廓を出で。色々様々 斷立て暇はくれる筈なれど。詞実に一つのうたてい難題。其方が親の手塚幡樂は武勇の譽ある者。暇をやる代りには親に我が法を勧め込み。味方に靡け從へよ其の時暇をやるとの事。地大事の親をいま〳〵しい恐ろしい。悪人の徒黨となし。現世後生も勿體なく。其の詞を聞捨てにそつと逃出で。詞源六様に逢ふ迄先づ鎌倉への思ひ立ち。あんまり父母のお顔が見たさ。お暇乞に立寄りしにま一足で危やや〳〵地觀音經が聞えずば此の世で父母見られうか。有難いお經の力とつ様かゝ様拾うたと。スエテ伏拜みてぞ泣きゐたる。地幡樂顔色打解けて。詞我を仙術に勧め入れ度きとや。成程々々徒黨に與し暇取つてとらせん。地同道せいと言へば母も娘もなうあさましい事いふ人。氣が違うたかと興さめ顔。詞ハテ愚かな誠に一味するものか。幡樂が表裏の智略眞實一味の色を見せ。近付き寄つてむんずと組まば。彼奴は若者力量者我は老體骨は枯れ木。微塵にはたき碎かるとも摑みついたる手は放さず。下になら下より突き上にならば上より突き。後を組まば我が胸板より串柿ざし。四郎が胴腹突き貫き國土の地怨敵討滅し我が身は死しても佛法王法に忠節の名を末代に遺さんと。言ひも終らぬ中よりもぞつと惡寒に更級が。色は木賊の眞蒼青に。苦しやなうと悶え伏し手足は氷額は殺の玉の汗。身を顫はし身を縮め息も絶え〳〵苦めば。父母驚き痞が出たか氣の盡きか フシ薬よ水よと立騒ぐ。詞アヽ病でない薬は入らぬ。恐ろしや四郎が術念をかけては千里も見通し聞きぬいて。形を吹出し仇をなす。父を勧めて一味にと編した僞。四郎が胸に徹してかぞつとすると等しく。四郎が來て身を責むる。地見て下さんせと上の襟押開けば。あらいぶせ恐ろしや頭に角ある大の蝦蟇。雪の肌にひつたりと四足を張つて肉を締め。ぎろつく眼は鋼の鍬を打つたる如くにて。胸に喰入る双の歯音 フシ鑪をおろすに異らず。地父母二日と見もやらず娘が苦痛うめく聲。病ならねば薬もなく。いで摑み殺さんと近付けば幡樂に。毒氣を吹きかけ眼を眩ます。狼狽へ歎く夫婦のさま。スエテ目も當てられぬ次第なり。幡樂涙押拭ひよし〳〵未來奈落も合點。今日より仙術の法に歸伏し徒黨全く僞なしと。詞につれて喰ひ放しひらりと飛んで蛙蹤ひ。紅花の舌をひら〳〵と蝕

出す面付。さしもの幡樂ぞゝ髮竪ち、詞某發起し一味の上は。地はや〳〵歸れといへども更に動ず。母は泣く〳〵アゝ思ひつけた。詞仙術に入る誓文には佛の像を踏まするとやら聞及ぶ。其の望かと地いへば悅び嬉しけに鳴く蛙の聲。ヲゝ易い事踏んでのけん持佛堂の佛々と。父の勇みは猶悲しく。私が苦痛を助けんとお慈悲は有難けれども邪道に墮すは私が罪。その儘置いて喰殺させて ッシドされと歎き。沈むで道理なる。地親子夫婦が一生の大慈大悲の繪像を下し。打敷に廣げ奉れば。蛙は猶も目を放さず。エゝ詞も利生も皆一心踏んでくれんと立かゝり。足を上げは上げたれど忍辱慈悲の觀世音。歴劫不思議の尊容廣大智恵の御眸。明暮恭敬禮拜して賴をかけし御本尊。貝今土足にかけん事如何なる惡業惡因と。思へば目もくれ心消え踏みもやらず退きもせぬ。足に蛙は眼を着け上ぐれば見上げ下せば見下す惡念力。涙をすゝつて幡樂大聲上げ。口惜しあさまし。泥水に這廻り。下駄の齒にも踏殺す小蟲一疋に惱され。詞今む所よう來たと。切りかくればかい潛り更生はなぶり物來世は墮獄の佛罰と。わつと叫び入りければ。母も娘も諸共に御罰は我に我こそと聲を。ばかりの喞ち泣き理。とこそ聞えけれ。地蛙は毒氣の虹を吹きかけ慾の相。是非に及ばず是迄と足を上ぐる頭の上。棚に積んだる瀨田柴の暫く〳〵と踏散し。やあゑいと飛んで下りたる若者。幡樂が足を取つて押退け。詞我等は葛西の郡司清重が嫡子。同苗源六清治。息女更級とは最愛の契約ありながら。漂泊の浪人心に任せず。更級安否聞かまほしく。今朝木明に藪垣を破り忍び入りし慮外眞平御免。地此の七草四郎蛙は我等が名字の敵。親の敵も同然とはつたと睨み。地やい蟲め汝蛙の形で切るは殘念ながら。武士の刀有難しと頂戴せよと。地むんずと摑んで刺通す刄の下ついと飛びぬけ。納戸の内に入るよと見えしが。忽ちに實の七草四郎が本體。間の戸蹴破りつつ立つたり。源六聲をかけ望む所よう來たと。切りかくればかい潛り更級が胸ぐら確と取つたる人質に。左右なくも討ちかけず幡樂夫婦も仰天し フシせんかう。盡きて見えにける。詞ヤイ爺よつく聞け。過分の金子に代へた更級。生けうと殺さうといふに及ばず四郎が物。但し今仙法に歸服し徒黨すれば。助けて直に暇をくれる。あの藪潛りの木棚さがしの鯉めに。與するといふや否やたつた一刀。否なら否應なら應。地一言の返答と。フシ退引きさせず詰めかくる。地一世の大事と源六これ幡樂。詞更級ゆゑに父が勘當受くる程大事の女なれども。家の敵には代へられず。あの蚯蚓喰ひの泥蛙めに。一味すると聞くや否や。蛙め共に更級も眞二つ。地有無の返答一言々々とぎしみかゝれば幡樂ちつとも驕かず。詞ムゝウしらさ海老にて鯊を釣り。麥飯で鯉を釣るは子供の業。武勇だてする若者が娘を餌にして親を釣るとは。娘を娘

をむす〳〵ムウハア〳〵〳〵〳〵腹筋千萬やい。左樣の事にかまけてうろつく幡樂に非ず。出直せ 地〳〵と恥ぢしめられさしもの四郎猶豫すれば。源六も刀引つ側めッシ兩方ためらひ控へたり。 地いで幡樂が望ありと床に立てたる白木と塗木の弓二張。鷹の羽と鶴の羽の征矢二手爪よりし素引して。二人が前に押分け。 詞サア此の弓矢持ッつて兩方に立別れ。一度に放せ武藝を試み。射勝ちし方は則ち聖なり一味なり。相討は面々の不運得心なるかと拙出せば。 地元より源六望む所四郎も更級突放し。弓と矢取つて立向ふ更級はつと身を冷し。 詞いや〳〵弓矢は放れ物。源六樣とて必ず勝つにも定まらぬ。 地母樣とめて下されと親子あわて立騒ぐ。 詞阿呆めそれ矢に當るなと。 地二人を父がひん抱かへ押しすくめ押し止むる其の際に。四郎源六互に弓と矢打ち番ひ。きりきりと引きしほる。 詞むさと放すな見物するぞ待て〳〵。やれ 地待て〳〵と聲をかけても保ち兼ね兩方一度にひやうど放つ。鏃と鏃が眞中にてはつしと中り。二本の矢柄は彫と成り微塵に碎け散つたるは。フシ揃ひも揃ひし手利なり。ホ、ウ 詞天晴矢業勝負は乙矢と二人を押退け。 地中腰に成つて見物す參りさうと源六。南無八幡大菩薩と心中に立願すれば。四郎も心に蝦蟇鐵枴海尊仙人と觀念し。矢束十分篦かづき迄引詰め。暫し保つて放れ際呼吸の拍子の眞中へ。幡樂飛入る矢は放るゝ左右の肋骨に二本の矢。はた〳〵すつぱと受留め。血煙はつと射手もハツ〳〵はつと弓投捨て。娘は驚き槌り付き スエテ泣くより外の詞なく。 地母は猛つて四郎は四郎ともいふべきが。 詞曲もない源六殿三寸か二寸こそ。手先狂ひと許しもせん。 地是程目當が違って弓取と言はるゝかと。恨み歎けば幡樂目を開き。 詞アヽ〳〵婆恨いふ事少しもない。なう兩人。始めの一矢の當りは細かなれども的が外れた。誠幡樂が望の矢壺に。ひつしと中りしは此の受留めし二本の乙矢。的に成りし某が物狂はしき樣なれど。皆娘が不便さゆゑ。四郎に與すれば娘共に源六が討たんといふ。源六に從へば四郎が娘を刺殺す。我此の矢先にかゝらずば人質に取られし娘。何とて命助らん。なう源六。冥途の郡司殿お事をいとしと思はるも。幡樂が娘可愛いと存ずるも。 詞人の親も我が親も親の心は親が知る。 地よも狂氣とは思すまじ。 詞なう四郎殿。多くの金銀にて娘が傾城の苦をぬぎし。大恩報ぜんにも一錢の貯へなし。金も返さず一味もせねば幡樂は大盜人。其の盜人を射留めさせし是が誠の望の矢壺。 地娘に暇をくれてたべ。エヽ 詞言ひ度い。〳〵言ひ度い事多けれど口が動かぬ〳〵と。 地いふ舌も強張つて顏もそこねる聲。親子は前後取亂し。まちつと生きて下されと。抱きかゝへ身を悶え聲も。惜まず泣沈む。 地源六つつ立ち。一命を捨てられし上は四郎が恩は相濟んだり。是から

は目前の舅の敵遁されず。サア來い勝負と抜き放す。地四郎すつくと立ちエ、しをらしい志。我が法は廣大にして人を殺さず。一人も仙術に勸め入るゝを本とする故。太刀打せず助け置く。此の情を思ひ我城郭に立籠り。一天下を引受け合戰の時味方に來い〳〵。但し是非に只今討ちたくばサア討つて見よ。地ヲヽ餘すまじと打ちかくる。刀の光に陽炎の形は。見えず成りにけり。詞エヽ口惜しや父といひ我といひ。二度迄討漏らすよし。地一念の悪鬼と成り。父子の無念を散ぜんと既に自害と見えける時。弱る聲にて幡樂。ヤレあれ止めよなう〳〵源六。詞犬死めさるな最期に申す事あり地是へ〳〵と近く寄せ。詞舅の敵との一言。嬉しゅ〳〵さり乍ら。全く四郎に取られし命でなし。彼奴と夫婦の娘同罪遁れず。急度訴人致さんと足立右馬之允に向つて言ひ放したる幡樂が詞。土灰に成つても違へられず。地あはれ暇を取る金かな緣を切り度し〳〵と思ひしに。今天地晴れて葛西の源六清治が妻と成り。詞娘は世間廣くなる。金に替へし一命は娘にこそやつたれ何の敵のあるべきぞ。地民の世話に雁一羽さへ矢は三錢の譽。二本の矢にて金に替へぬ娘儲けた悦び。源六が舅との一言臨終の耳に聞く事は。勸むる六字に劣るまじ。十箇年の夫婦が命娘が憂き身の禍にて繋ぎしもの。始めは娘を產み出す今は娘が安養世界へ。我を產み出す命の親の着せられし白小袖。極樂淨土に生れ出づる幡樂が今のフシ產衣ぞや。地なう聖殿。重ねて四郎退治の時。詞軍門出の餞吉左右の矢を聖引出と。地二筋兩手に引つ摑みぐつと拔いて差出し。莞爾と笑ふも老木の花見る間も夢と息絕えたり。親子わつと死骸に取付き父よ夫よと呼返し。泣叫びては聲限り縋り付いたる手向草。返らぬ水にあこがるゝ親の別れ夫の別れ。敵に別るゝ本意なさも共に世上の愛別離苦。結びそめたる夫婦の緣。結び繼がれぬ裝束の緣ギン二つの緣を一筋に。歪まぬ法の誓願力。彌陀の國迄武士の永き。譽を殘しける。

第四

地烏は高く飛んで矯戈の害を遁れ。鼠神丘の下に穴掘つて人の薰ぶる患を遁るとかや。扨も七草四郎高衡。筑紫七草の城に立籠り。足立富樫の兩大將數日是を攻むると雖も。四郎が仙術に寄手度々敗北と。早馬を以て鎌倉へ注進櫛の齒を引くが如く。此の度は秩父の重忠七千餘騎を引率し。其の身は鎧の陣羽織裏打鎖の唐革小笠。雲雀毛の駿足馬の背撓わに跨つて。隨兵小具足前後にむら〳〵村濃の。簇の足並西の宮フシ須磨の上野に着き給ふ。地後陣の方よりなう〳〵と呼ばはつて。二人の女わきせきと重忠の召されたる。馬の絡頭しつかと取り用ありけに息つきあへねば。近習ども聲々に。詞ヤア見苦しし女童それ引退けよと立ちければ。重忠御覽じさなせそ〳〵と押止

め。コリヤ〳〵女。重忠に何用ある語れ聞かんと宣へば。二人は兩手を土に蹈ひ恥かし乍ら自らは。葛西の郡司清重が娘琵琶の姫。詞又是なるは兄源六清治が妻更級と申す人。地父清重の切腹本領を召上げられしも。七草の四郎より事起り。兄弟の者の身の上は御存じのわけ申すに及ばず。兄源六は七草の四郎を討たん爲。詞筑紫へ下り樣樣心を盡せども。四郎が不思議の幻術にて。今に得討たず徒に日を暮らす由。詞此の度重忠樣筑紫へお下りなされなば。手間際入らず七草の城を攻破り。四郎を御手にかけらるゝは案の內。詞餘人に四郎を討たせては兄源六が本領に立歸り。葛西の家を相續の願ひも絕え。地一天四海の物笑ひは。身の悲しみ。フシばかりでなく。地先祖の恥辱父への不孝。自らも亦足立殿へ嫁入の緣も切れ。自害致すは兄弟ばかりか。詞更級樣お前一人生きてはよもや。すりや三人は死ぬるより外思案もなく憚りも顧ず。地お馬に縋つてお歎きは源六諸共我々が。七草四郎を討取る迄に道中御逗留。ゆるゝなされて下さるれば葛西の家をお取立。三人命助かる事お慈悲とばかり兩人はスエテ土に。身を伏し泣きゐたる。詞重忠馬上をひらりと下り。ムゝ扨は清重の娘達なる父ら切腹に及ばず本領沒收迄は無き事を。例の梶原が依怙の沙汰。年月の悲み思ひやる。地殊更女の餘儀なき賴み重忠が身に取つては。迷惑ながら聞捨てんは不便々々。詞今日より兄源六に日を二日汝等達が女足道中を急ぐともさぞあらん。地一人に二日づつ二人に四日合せて六日は重忠が。情を以て道中隙入りフシ得さすべしとありければ。地二人ははつと頭を下け。アヽ有難や忝や。生中お禮は冥加ない。サア更級樣一足もと悅び勇み駈出づれば。詞ヤレ暫く〳〵と呼戻し。四郎が術は鬼神も同然。酒呑童子以來の朝敵。足立富樫數萬人の手に及ばぬ者。汝等三人が力には勇むともかひあらじと。地懷中よりくりしめの注連繩取出し。詞是は江の島の辨財天にて。朝敵退治の祈禱として。千座の大法祕法を修せられ。地鎌倉殿夢中に授かり給ひし注連繩更級に得さするぞ。神明佛陀の擁護によらば。いづれの敵かフシ滅さざらん。地琵琶の姫には重忠相傳の此の陣笠四郎を討つ迄是を貸す。詞父の郡司は浮世の夢の破れ笠兄弟は世を忍ぶ笠。詞葛西の家の三蓋笠は絕えたれども。今より兄弟が二蓋の笠に此の陣笠を取交ぜて三蓋笠の家の指物天が下に押立て。四郎が首を提げたる悅びの對面重ねて〳〵さらば。地〳〵と立ち給へば二人はあつと押戴き。殘る方なき御厚恩此の注連繩のくり返し。申す詞もなくばかり跡伏拜み〳〵。情の笠を甲に着て旅立つ。

筑紫の　三重

旅の素足

歌君に逢はねば。解かれぬ物は。二人結びし下紐と。戀しゆかしのむすぼれ心。それ

で暮うて ナホス フシひかれ引く。 地琵琶の姫更級は。重忠の情にて六日延びたる日數より。いとゞ心は急がれて。 スエテ月も明石の浦傳ひ。寢ぬに亂るゝ。黑髪の フシむらく〜千鳥。濱千鳥。餘所の寢覺の夢にだも。見知らず 知らぬ國越えて オクリ筑紫に。高き七草の。 フシオクリ城へと〳〵尋ね。行く道の フシ先を急がぬ。旅ならば。此の浦山の名所をば。 本フシ訪うて眺めて道の記に。腰折歌の一首をも詠まば硯のうみづらに。これ〳〵見さんせ美しや。走書する追手船。 長 地門司が關より便船し豐前の國の黑崎に上る朝日と打連れて我も西へと心せく。苅萱の關朝倉や。小米峠にさしかゝり。 スエテ櫛田の神にぬかづけば。きねが鼓か神樂太鼓か。それでないぞや貝鉦の音も間近く響き來る。 ワキなう氣遣な更級樣。俄に不思議の鉦太鼓何であらうの詞の下。上の山路をしどろ足。 シテ地更級耳を傾けて。 謡ム、聞えたあの拍子は。軍陣の押太鼓。扨は秩父がぬつけりと私等を騙して筑紫への寄手の勢に紛れない。 地エ、たらされた後悔と見る程もなく軍兵の影は見えねど眞先に。 二人ぬつと振出す連枷を二本からけて打碎く。ちぢわ村の數石衛門と磨旗に書き記す。足手纏ひの婆嗚ども。人數八百五十人池尻口の持主と。 士氣放れぬ筆太は讀めた〳〵四郎が味方。何樂みに蒲城の。せんもない鎌山杓目籠のあらき木綿旗。風もたまらず森櫛八。くさか村の徒黨の勢。纏を押立て引續く磨臼篩の物印。敵をもみ割り立割りに。手並を見せんと呼ばはつて聲も高句の與茂十郎。口の津勢を騙催しッ シざゝめき渡る足の下。土を鋤鍬竹さらへ箕を旗物に不吉の印。敵の落城疑ひも中津の一族蟹川忠太と墨黑に書いたる筆の命毛も程は嵐に誘れて。 スエテ落ち來る鉦と諸聲に 歌鉦を叩いて。佛にならば。てんと。鍛冶町は。皆佛。やれ皆佛。てんと。鍛冶町は皆佛。夜明の鳥。高い山から。ころ〳〵と落ちて。見たも。皆いたもしなだんご。臼に ナホス手杵の フシ持印は。 謡佐藤喜庵に付く勢と。ちぎれ〳〵に走り來る。 コハリ其の外蓑笠はね釣瓶。唐鋤稻扱千石通荒骨車綿くり絲車。農具は家の物じるし。上つら。下つら。ふつかつき浦 ナホス村里の土民どもしどろに成つて。馳せ過ぐる フシ跡は峯吹く。松の風梢に騷ぐ村烏と。聲をしらべの琵琶の姫いざ此の勢に打紛れ。易々城へ忍び込み四郎を討たうぢやあるまいかと。言へば領く稻の穗の案山子に立ちし蓑幸ひ。二人は肩に打ちかけて忍ぶ。姿も花薄。萩は亂るる淺茅が原かき分け。踏み分け行く道も跡を。 慕うて 三重〳〵急ぎける。

 地抑七草の城郭と申すは。城の廻り一百四十三町餘。二方は海浪浸々と。嶮岨は屏風を立てたる如く。船を寄すべき手明きもなく。一方は斷崖八十餘丈。 ナホス下は深田の フシ要害に。 地築地を高く矢狹間を切り。

雜兵三萬六千人楯鉾弓槍旗鐵砲。不時を警め塞を固め。四郎は主居の本丸に。龍蛇の勢さながら天に飜り。雲井に飛ばんと蟠れり。南の大手は葛西の源六。東の山手は富樫の左衛門。大軍を以て攻圍み。時時貝鉦鳴らし遠巻に日を暮せば。西の山手は足立右馬之允景久日々夜々の鯨波兵糧の道斷切つて。重忠の下向を待ち。スエテ空しく數日を送る所に。地何とか思ひけん富樫の左衛門。手勢の中よりすぐり立てたる兵廿騎許り召連れ。田尻口の松原を。七草の城の搦手に フシ物音もせず急ぎける。富樫が執權車田傳藏息を切つて走付き。地數度の軍に味方の御勢。悉く打死し敵は十分勝ち誇つたる鏃ひ口。僅の勢にて押寄せ。犬死せんとの御所存か。地いざ御歸りといはせもあへずィャさうでない〳〵。詞鎌倉より秩父の重忠近々に下ると聞く。彼に功名させて何と富樫が立つものぞ。城中はは や兵糧につまり。大半は餓死。牛馬を喰ひ革筐を嚙り。弓引く力もなしと聞く。コリャ拔駈の手柄此の時。四郎が首は此の腰に握つた。地城を乘れ〳〵續けや者どもと塀に手をかけ既に乘らんとする所に。地城中には合圍の半鐘打立て〳〵。數千の軍兵顯れ出で手んでに大石を打ちかくれば。南無三寶と此方へ寄れば大木を投げかけ〳〵。砂を撒きかけ引くも引かせず。乘るも乘らせず石子詰。一騎も殘らず打ちみしやがれ逃ぐる富樫が頭の鉢。七つ八つに打割られ手覺もなき手柄だて。敵の手柄と成りたりし フシ討死の程ぞ哀れなる。地城中の諸軍勢心は一致に逸れども。兵糧には盡き果てせめて一日の糧があらば打つて出で。打死せんものを餓死する事かと。爰に寄つてはエ、無念。彼處の方にはエ、口惜しと。立つる腹さへ胄に着きてスエテ物いふ。力も無き所へ。地大將四郎乘馬の口引立て。二の木戸迄軍勢を招き。詞かうなる迄心を變ぜず。我が宗門を尊ぶ事過分々々。寄手より兵糧詰に逢うたれば。草木の根を掘り藁を煎じ。犬猫は言ふに及ばず。城中の牛馬一疋も殘さず喰ひ盡し。殘る物とては此の馬一疋。是を手づから切つて方々に與ゆるは。四郎が身を切つて振舞ふも同然と思ひ。ちと力づけ一方を切破れ。地追付け寄手を討滅し甘い目に逢はせうぞと。引寄せて馬の鞍際押切り押切り。サア喰へ〳〵と言ひければ。餓鬼に水を見せたる如く。アア有難い忝いと掴み喰ひむしりくひ。詞此の御恩は忘れぬ。お志を内の嚊にも傳かせんと。地陣所々々へ持歸る。かく迄邪法に浸み込みし。フシ惡因緣ぞ恐ろしき。詞かゝる所へ獅子木佐仲太龍出で。詞ちゞは村の勢の内に女二人紛れ込み。城内を忍び窺ふゆゑ。召捕つて候と引据ゆれば。四郎きつと見。ヤア珍しや更級琵琶の姫。爰は野武士ども何萬騎か取巻いて。日夜に攻むれども落されぬ城中に忍び入り。何とせうといふ事。城中は糧に盡き牛馬迄喰ふ所

へ生物到來。地御當地珍しい肴括つて置き。更級が太り肉。後程切つて賞翫。底味の甘い所。豫て四郎が覺えてるとオタリ せゝ笑う〳〵てこそ入りにける。地エ、腹の立つ仕損じて。牛馬と同じう喰物になるが。なんと更級樣口惜しうはないかいの無念にはないかいの。詞無念なとも口惜しいともエエ腹の立つ。見ればこなさんの縄は延びてある。コレ爰を喰ひ切つて下さんせ。早う〳〵ヲ、合點と更級は。地つつと寄つて琵琶の姫の高手の縄。齒も折れよ齒莖も裂けよ。一世の大事と噛切り〳〵。しゝ切る念力佛力や加はりけん。コハリさしもに締めたる高手の縄。ふつつ〳〵と喰ひ切れば。小手の縄も綴まりて。ナホス縛左右無く解けにけり。地今は琵琶の姫手は自由立寄つて更級が。縄を解くやらほどくやらア、嬉しい有難いコレ。詞彼の注連縄樣も懐にござる。これが守りと成つたであろ。地此の神力で切入らば四郎が鬼神でござらうが。首は二人が手の内に。サア フシ切るまいかと氣をせけば。詞更級抑へて。いや〳〵。二人ばかりでは言はれぬ二度のかけ。あの西の松山は景久殿の御陣所。東の森は源六殿の陣所ぢやけな。あれへ矢文で知らせて外から攻めさせ城中の騒ぎを見て。地内から二人裏切せば。四郎を討つは案の内。爰から矢文で〳〵と。二人は小袖の下褄押切り。筆が欲しい硯がな。ならぬ望に際を入れ見付けられては大事ぞと。互の小指喰破り。長うは書くまいつい一口。早う〳〵知らせの血文。一人が巻けば一人は立つて高櫓の。弓矢取出し矢の根にしつかと括り付け。更級は清治に琵琶の姫は景久へ。互の夫樣參る。ひやうふつとと切放す思ふ目當は違ひなく。二人の矢先は遠鳴し フシ陣所の庭にぞ落ちてける。地サア此の内に四郎が在所。捜せ〳〵と帶引締め。刀も櫓に有難しと。取つてはぼつ込み氣も勇み。フシ城中深くぞ進みける。地夫を思ふ血の矢文見るより二人は心に徹へ。景久清治時も違はず一陣に進み出で。諸卒を下知して東西より鈞瓶放つ大砲に。神明擁護の彈丸鋭く。さしも固めし二つの櫓。コハリ石垣壁土屋根瓦。くわら〳〵びつしやり崩るる音。百千の雷霆頭の上に落ちかゝり。須彌の四州に風あぶれ。四大海の荒波を。ナホス一度にどつと吹巻く如くフシ大地も裂くるばかりなり。地軍勢に先立つ景久清治二の丸に乘込んで。十方に切掻れば。獅子木大矢野森千束。高「何ちゞはの郷民ども拔連れ〳〵討つてかかる。二人は是を事ともせず。左右に別れ亂入り手を盡してぞ 三重へ戰ひける フシ鷲に兎。地鷹に雉猫に鼠の出逢ひし如く。二人が手にかけ六人ながら。落花微塵に切散らせば フシ敢て刃向ふ者もなし。地食に餓ゑし賊民ども。昔に驚き堪り兼ね陣屋々々を這出づる。足は蟷螂冬の蠅。手には杖つく力さへ。泣く〳〵轉びにじるとすれど。頭は地に着き腹は背につき這ひ蹲び。命を

お助けお助けと動くは目玉蟲の息。ッシ此の世に居るも名ばかりなり。地清治きつと見。コリヤ餓鬼阿彌も同然ながら。邪法一味の方人等切盡さんと立ちかゝれば。ア、情ない胴慾な。立つて手向ひするにこそ。地轉びました御免あれ。お慈悲〳〵と絶え絶えに、スエテ土に摺り付き泣きゐたる。詞景久押入つて。切らずと死ぬべきうんざいども助くる〳〵。地足手纏ひ屈んでゐをれと呼ばはれば。詞アヽ有難いお助け。轉ぶといへば助かるさうな。地ころび〳〵とよろめいて ッシ皆々陣屋に這入れば。地外には味方の寄せ太鼓。一度にどつと鬨の聲。景久清治力を得。あれあれ後陣も續いたりいざ本丸へ尤と。天にも上る心地して ッシ城中へこそ切入りける。地四郎 夜叉の荒れたる如く。琵琶の姫更級が髻髪。兩手に絡巻き中に提げ躍り出で。詞誰が縄免して推参至極。寄手の勢を引入れしも。汝等が仕業よな。エヽ地につくい奴。我が邪法にて寄手の奴原微塵になし。うぬ等に見せて吠えさせうか。但しは捻り殺さうかと掴ぎ付くる膝の下。コハリ不思議や更級が懐中より。金色の光矢を射る如く。黄色の蛇現れ出で。頭を擡げ紅の。舌をちら〳〵差向へば俄に四郎うんとばかり。眼くらみ腕も痺れ。二人を突退け踏ん反りかへり。苦しむ息の中よりも。蛙の姿飛び出づれば二人の女も動顛し。物蔭に立忍べば蛙は聲を雲に鳴き。大地に形を掘り入らんと。恐れてッシ逃ぐるを追廻す。蛇は宇賀の御魂。四郎が邪法蛙の術。虹を吹きかけ身を包めど手だても忽ち蛇の。悪氣に吹消し吹拂はれ。互に喰はん喰はれじと。追つつ追はれつ狂ひしは目も當てられぬ 三重入風情なり。地神明守護の一口に蛙をぐつと呑むよと見えし。蛇の姿引替へて。辨財天の御法連縄ッシ虚空に。ひらめき失せ給ふ。地四郎むつくと起上り。茫然たる際を窺ひ。琵琶の姫更級太刀抜き持ち。詞大悪人の四郎め邪法の蛙はたつた今。蛇に呑まれたを知らぬか。術がならばして見をれ。地所望。ッシ所望と嘲れば。詞四郎はつと心付き現の如く覺えしが。地扨はと心驚きて祕文を唱へ。虚空に向ひ口を攝めども手に入らず。雲を招くに下らばこそ。エヽ口惜しや我が術は盡き果てしか。腹立や無念やと忿の眼に涙をそゝぎ。拳を握り立つたる所へ。足立右馬之允景久一文字にかけ來り際をあらせず討つてかゝる。四郎ひらりと身を外し。弱腰つかんでどうと引敷き。詞邪法の力は盡きたれども。うぬ等如き五人三人蠅蟲とも思はうか。首引抜かんとする際に。地琵琶の姫更級駆寄つて切付くるを早速にかけ。うんと蹴飛ばし ッシ既にかうよと見えたる所へ。葛西の清治走りかゝつて四郎が首。水もたまらず討落し景久を取つて引立て。莞爾と笑うて立つたるは。ッシ心地よくこそ見えにける。地なう兄様か我が夫か。秩父殿の御厚恩情の笠は此の時と。兄弟の

笠重忠の笠。取添へて三蓋被。絶えて久しき指物をどつと押立て大聲あげ。閻佛法の仇王法の敵。父が恨所領の敵。七草四郎を葛西の源六清治が討取り。朝敵滅び失せたりと。地高らかに呼ばはれば。秩父の重忠御馬を乘込め。ヲヽ目出度し手柄々々。梶原が取上げし金の采配今重忠が得さするぞ。家に傳へて大將の子孫の榮え更殺。夫婦が中の精次第。琵琶の姫も景久に仲人は秩父の重忠。吉日選み婚姻せよ。地ツメいざ凱陣勝閧と早々直す旗の足。駒も勇みの高嘶き。朝敵邪法は絶え果てて。絶えたる家は引起す君臣和合の道廣き。惠も廣き武藏野に。再び譽を顯せり。

第五 の松竹梅嫁入雛形 雛形

地千早振る フシ女神男神の。御祝言。爰にかたどる大館。足立右馬之允景久葛西の源六清治。二祝言を一座敷聟は心の浮橋に。嫁入御寮のあなにへやうまし雜煮も味甘の。逆鉾々々と フシ賑へり。ツレお客がたへの靈應とて數多の藝者藝女郎。お里は京の色所あやかりものと身の上の。二人松と梅との君達より。松竹梅の色直し。スエテ京染小袖の部屋見舞。ツレ或は縫箔織物の。模樣づくし手をつくし文章豐に書き記し。やまとほのめく藝女郎。目錄をこそ讀上げけり。シテ進上。ツレ島臺。シテ島臺。二人あやかつて贈り參らせ候の松は。禿の緣より。子の日根引の御全盛。末は尾上の友白髮。ばゝに成る迄紅絹裏や。十筋衛門も鬢付の。梅花油のかをり來る床は。天職梅の花。二人股竹の相生に。子竹根强く節强く。ナホス枝葉も榮え給ひけり。地先づ上着のお小袖は。千代を染込む松葉色松に群れゐる千羽鶴。十二の雛を飼ひ育て。君が幾代の友鶴と。壽きてこそ フシ染めにけり。扨又千草の摺衣。歌肩にかるもの花折りかけて裾に。いのじが寢た所え。ゑい〳〵ゑい風景の筆立に。心浮島 フシ飛ぶ螢。澤に澤蔦水桔梗。光琳松の三穂が崎。墨繪の雪に。煙立つ富士の。姿も清見寺撞かぬ。フシ鐘さへ響き來る。しやんとして扨美しや。シテ ハルフシ肩から裾を。二人吉岡に。御簾に簾をかけられしは。ツレ思ひ出でたり其の昔賀茂の祭の車爭ひ。シテ ウタヒ車の前後に。ツレばつと寄りて 二人々轅に取付きつゝ人給ひの奥に。ヲヽ〳〵押しやられて物見車の力もなき。身の程ぞいとほし。ナホス フシらしけなり。牧に爪とぐ駿馬の。尾髮を嵐に吹きみだき野邊の若草踏み散らし。嶮岨を穿つて眞下り或は谷より峯に追つかけ。追つ立て高嘶き友をトル三疊集めてトレ〳〵狂ひ馬。フシ是をくゝしの。摘み染 二人 相ノ山一村。しげる柳蔭肩は。すぬひの薄霞。飛びかふ鳥。七つ八つ夜明を。告ぐる有樣は憎や。逢夜の仇がたき見果てぬ。夢やさまずかと。ツレ 餘所の戀路を身の上に。思ひ知らるる風情もあり。地黑模樣に シテ歌たどり行く。二人尾上の鹿の。亂れ角。末の松山つまこひかねて。紅葉踏みわけ。け

い〳〵ほろゝと。鳴くわゐさりとは通ふわの。はて焦れての。これ〳〵〳〵誰もいな。あのや業平はこれさ。〳〵。は豆腐屋の果かのほんゑ。しんぞまめにはこれさ。〳〵。打込んだ。文覺朝も夜さりも。水なぶり。官位器量も捧。にふり。シテタタキ武藏の國の果迄も。ツレ顔をよごせし隅田川。シテ伊勢をの。ツレあまの。シテ汐えりも。二人つめれば心三芳野や。シテ色に身代宇津の山。ツレ高安。シテ齋宮二人文覺西の對。シテ二條の后の俤に。似たつきもなき戀の闇。さそひ出せし白玉を。どこぞと問へば芥川。ヘエテしばしは。露の置き所。二人地伊勢物語の模樣もあり三河にそめし。杜若。フシ花紫の。總鹿の子。紅鹿の子鶴鹿の子。冷泉梅に。短冊。花に樽。ハヤシ籠に鶯。フシ榮種に蝶。繪に書く野邊に音するは。ギンハルフシ誰が乘る駒の。轉蟲草に亂れてちんから〳〵。松蟲の音はちりりん〳〵。綸子小袖のいたり染。シテ緞子天鵞絨。ツレ金更紗。シテ繻子は五色のコハリ卷絹を。二人舟に山積む綿の原漕ぎつれ。〳〵入舟の蓬萊山とは難波津や。ツレ積んだる俵。シテ納むる黃金。二人輝く提灯明らかに曇らぬ玉のゐいころ〳〵。ころ〳〵頃は霜月や顏見世淨瑠璃大吉日。千秋樂は民昌榮。萬歲樂には命を延ぶ。相生のナホス松風さつさつの。聲ぞ目出度けれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへ共又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを紀せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾

竹本博教

正本屋　山本九兵衛版（朱印）

大阪高麗橋壹丁目　山本九右衛門版　印